

『開目抄』に現われた一念三千義について (一)

桑 名 貫 正

一 はじめに

近年、一念三千に関する研究が盛んである。目についただけでも、十数本の論文⁽¹⁾を読む機会を得ることができた。一念三千の法門は、日蓮聖人教学にとって重要な法門である。日蓮聖人は立教開宗の出発点から教学の基底に置かれており、佐渡以降、はじめて聖人教学の独自性である本化別頭の教学を表明なさるが、この本化の教学も、また一念三千の法門を根底としているのである。従って、この種の研究の中心も、天台教学と異なる日蓮聖人教学の独自性の鮮明さを發揮するため、勢い一念三千等の名目を挙げ、迹門の一念三千・本門の一念三千。理の一念三千・事の一念三千。一念三千と妙法五字・一念三千の仏種等に心を碎かれているのも、また当然のことであろう。

日蓮聖人の一念三千觀を研究する場合、『日蓮聖人遺文』中、一念三千に関する論述箇所を先ずもって把握しなければならぬ。一念三千は日蓮聖人教学の根本となっているだけに、「四百余篇の御遺文中一念三千論に言及せぬものは殆んどない程である」と見る人もいるし、或は遺文を通覧し、意外なことに「一念三千という語すら極めて限定された遺文についてのみ用いられている」とし、主要な遺文に見られる四七箇所を挙げている人もいる⁽²⁾。又、『觀心本尊抄』以前には「一念三千の記述は三十箇所を超える」程度と見ている人もいる⁽³⁾。

〔開目抄〕に現われた一念三千義について(一) (桑名)

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)(桑名)

これらの研究に催されて、改めて『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻を通読して見ると、真偽問題の決着がつかない日進の古写本、或は日向の古写本、日持作の允可書、古来より真偽問題があるとする遺文を全部、取り除いて見ただけでも、一念三千という名前が出てくるのは一五六箇所に見ることができ⁶る。しかも確実なる遺文に圧倒的に多く、一二五箇所論述が見られる。『観心本尊抄』以前では八五箇所記述されている。遺文中、内容が重要で然も論述が多いのは『開目抄』の二十箇所と『観心本尊抄』の十八箇所である。『観心本尊抄』の一念三千の研究は茂田井先生や庵谷先生等において、その研究の成果は見られるところである。しかし、『開目抄』における一念三千の研究は、これまで部分的な考察があっても、全体的な研究は見当らない。そこで、本小論は『開目抄』の中に、一念三千がどこにどのように記述され、展開されているのかを大系的に考察を試みるものである。

二 『開目抄』の一念三千の記述箇所

『開目抄』における一念三千観を認識する場合、『開目抄』のどこにどのような論述が見られるかを、先ず検討すべき必要がある。それは、本抄の一念三千論の展開を見る上で都合がよいし、また研究上、不可決な作業でもある。『開目抄』中、具体的に一念三千の名前が見えるのは、次の①②③の箇所である。この数は、遺文中、一番多く記述されている数字である。

① 一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり。龍樹天親知て、しかもいまだひろいださず。但我が天台智者のみこれをいだけり。⁷

② 一念三千は十界互具よりことはじまれり。法相と三論とは八界を立て十界をしらず。況や互具をしるべしや。⁸

- ③ 善無畏三藏・金剛智三藏、天台の一念三千の義を盗として自宗の肝心とし、其上に印と真言とを加て超過の心をこす。
- ④ 其の子細をしらぬ学者等は、天竺より大日経に一念三千の法門ありけりとうちをもう。
- ⑤ 華嚴宗は澄観が時、華嚴経の心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偷入たり。人これをしらす。
- ⑥ 此等の経々に二の失あり。一には存行布、二故仍未開權。迹門の一念三千をかくせり。二には言始成、二故曾未発迹。本門久遠をかくせり。此等の二の大法は一代の綱骨・一切経の心髓なり。
- ⑦ 迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。
- ⑧ しかりといえどもいまだ発迹頭本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るのごとし。根なし草の波上に浮るににたり。
- ⑨ 本門にいたりて、始成正覺をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき頭す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。
- ⑩ 法華経方便品の略開三頭一の時、仏略して一念三千心中の本懐を宣給。始の事なればほととぎすの音をねをびれたる者の一音きゝたるがやうに、月の山の半を出たれども薄雲のをほへるがごとくかそかなりしを、舍利弗等驚て諸天龍神大菩薩等をもよをして、諸天龍神等其教如恒沙。求仏諸菩薩大教有二十八万。又諸万億國、轉輪聖王至合掌以敬心、二欲聞二具足道、等は請せしなり。文の心は四味三教四十余年の間いまだきかざる法門うけ給はらんと請せしなり。

【開目抄】に現われた一念三千義について(一)(桑名)

「開目抄」に現われた一念三千義について(一)(桑名)

- ① 華嚴・方等・般若・深密・大日等の恒河沙の諸大乘經は、いまだ一代肝心たる一念三千大綱骨髓たる二乗作仏久遠実成等、いまだきかずと領解せり。¹⁷⁾
- ② 法華經の種に依て天親菩薩種子無上を立たり。天台の一念三千これなり。¹⁸⁾
- ③ 華嚴經乃至諸大乘經・大日經等の諸尊の種子皆一念三千なり。天台智者大師一人此法門を得給えり。華嚴宗の澄觀、此義を盜て華嚴經の心如工画師の文の神とす。¹⁹⁾
- ④ 真言大日經等には二乗作仏・久遠実成・一念三千の法門これなし。²⁰⁾
- ⑤ 善無畏三藏震旦に来て後、天台の止觀を見て智発し、大日經の心実相我一切本初の文の神に天台の一念三千を盜入て真言宗の肝心として、其上印と真言とをかざり、法華經と大日經との勝劣を判ずる時、理同事勝の積をつくれり。兩界の曼荼羅の二乗作仏・十界互具は一定大日經にありや。第一の誑惑なり。故伝教大師云新来、真言家則派、二筆受之相承、旧到華嚴家則隱、影響之軌模、等云。²¹⁾
- ⑥ 龍女が成仏此一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらわす。法華經已前の諸小乘經には女人成仏をゆるさず。諸大乘經には成仏往生をゆるすやうなれども、或改転の成仏、一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。挙一例諸と申て龍女成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし。²²⁾
- ⑦ 又仏になる道は華嚴唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪觀等も実には叶べしともみへず。但天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。²³⁾
- ⑧ 此一念三千も我等一分の懸解もなし。²⁴⁾
- ⑨ 而ども一代經々の中には此經計、一念三千の玉をいだけり。余經の理は玉ににたる黄石なり。沙をしぼるに油な

し。石女に子のなきがごとし。諸経は智者猶なほ仏にならず。此経は愚人あほう仏因を種くわべし。不求解脱解脱自至等ふとら。
②⑩ 設た山林にまじわって一念三千の觀をこらすとも、空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機をしらず、摂折の二門を弁わへずば、いかでか生死を離はなべき。²⁰

三 『開目抄』中の一念三千義の展開

『開目抄』の中で、一念三千の最初の記述が見られるのは①の文であるが、その前文に

但此経に二十の大事あり。俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗等は名をもしろず。華嚴宗真言宗との二宗は偷ちゆうに盗たうで自宗の骨目こつめとせり。²¹

の表現が見られるのは、一念三千に連係している内容を指している。つまり、俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗等の五宗は一念三千の法門どころか、二乗作仏・久遠実成の名前さえも知らない宗であると指摘し。点線の部分の「骨目」とは、一念三千を形容しているので、華嚴宗と真言宗の二宗は、天台宗の一念三千の法門を盗んで自宗の肝心としている宗であると批判しているのである。従って『開目抄』では、はじめに各宗の一念三千觀を端的に捕えて出発しており、天台の一念三千の法門を中心に一念三千觀を展開しているのである。その各宗の一念三千觀の具体的な内容は後述されてくるが、とりわけ真言宗・華嚴宗の場合は、一念三千盜義の問題が指摘されているので③④⑤⑥⑦⑧⑨等に詳細に論述されてくるのである。

①の文は、本門の一念三千の義と、その出処を述べられたものである。本門の一念三千の觀心は、色々と検討してみると、究極的には法華経の本門、しかも寿命品の文の底に沈んである所にここないと本当の一念三千にならないとい

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)(桑名)

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)(桑名)

うのである。元來、一念三千のどころは(天台大師『摩訶止観』第五の「終窮究竟の極説」の一念三千の法門は)、迹門の十如実相にある訳で、日蓮聖人も、そのことを正嘉二年三十七歳作の『一代聖教大意』(目師本・定七一—三頁)以來、論じている所である。この一念三千が迹門の方便品でなく、本門に根拠があると述べられたのは文永八年五月五十歳作の『十章鈔』(真蹟・定四八九頁)の次の文と、二度目である。

止観に十章あり……大意より方便までの六重は先四巻に限る。これは妙解迹門の心をのべたり。今依二妙解一以立三正行と申は第七の正観十境十乘の観法、本門の心なり。一念三千此よりはじまる。一念三千と申事は迹門にすらなを許されず。……一念三千の出処は略開三之十如実相なれども、義分は本門に限。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但真実の依文判義は本門に限べし。

では、なぜ本門に限るのかという理由については、後述するところの⑧発迹顕本の内容と⑨本因本果の法門の内容等が顕われない限りは、まことの一念三千とはならないのである。このことを、天台大師だけがシッカリと胸のうちに体得しておられたというのである。

①の文は、『開目抄』の序分に相当する所で論述しており、最も教学の核心の部分を一気に先きに出されて、諸宗との勝劣の決着を考慮されたものと覚える。

②の文は、十界互具が一念三千の法門の基礎となると見られたのである。十界互具を論述する遺文は、二十一歳作の『戒体即身成仏義』(定一〇頁)に既にあり、三十七歳作の『一代聖教大意』(目師本・定七三頁等)、三十八歳作の『守護国家論』(真蹟曾存・定九七・一一〇・一三五頁)等と常にいうところである。これは凡夫(人間)の身にも仏界が具わっているという、天台の理の一念三千観である。『開目抄』の、この所で十界互具を出された訳は、

次の文に掛っているのである。

法相と三論とは八界を立て十界をしらず。況や互具をしるべしや。俱舎・成実・律宗等は阿含經によれり。六界を明て四界をしらず。(定五三九頁)

法相・三論・俱舎宗等の各宗に十界互具がないことを言つて、各宗に一念三千が有るか無いかの判断の基準にされたのである。その理由は、仏教の中で一念三千があるのは法華經に限るという論証のためなのである。その具体的な事例として、推測されるのは左の文である。

内典に南三北七の異執をこりて蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師にうちやぶられて、仏法二び群類をすくう。

(定五四〇—一頁)

天台大師が法華經の極理たる一念三千を以て南三北七の十師の邪見を打ち破るという記述である。これによって世に法華經が広まり、国土が安穩となり、人類が釈尊について二度目に救われたと強調するのである。法華經の流布により、国土が安穩となり、人類が救われるという史観は日蓮聖人の立教開宗の出発点から考えられるが三十八歳作の『守護国家論』、三十九歳作の『立正安國論』に顕著である。

③と④の文は、日蓮聖人の真言宗の一念三千観である。前述に真言宗が天台の一念三千を盗義した問題を掲げたが、ここでは、真言宗の一念三千盗義の有無を人師と經典の上から観られて批判をされたのである。

③の文は、人師批判の問題であつて、真言宗には、もともと一念三千の義がないのに善無畏・金剛智等が天台の一念三千の法門を盗んで自宗の肝心としているとして、真言宗は元祖に問題ありというのである。この人師批判は『開目抄』以外でも実に多く見られる。真言宗の一念三千盗義の人師批判の最初は弘長二年四十一歳作の『頭勝法鈔』

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)(桑名)

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)(桑名)

(真蹟曾存・定二七〇頁)と次の文であるが、一念三千の盜義については三十八歳作の『二乗作仏事』が一番早く見られる。

大日經真言宗は未開會、記小久成なくば法華經已前なり。開會・記小・久成を許さば涅槃經とをなじ。但善無畏三藏・金剛智・不空・一行等の性惡の法門・一念三千の法門は天台智者の法門をぬすめるか。(定二七一—二頁)

そして、自宗の肝心とされた内容については文永三年四十五歳作の『善無畏鈔』(真蹟断片)では、善無畏說・一行執筆の『大日經疏』「入漫荼羅具緣真言品第二疏」の文を左の如く引用し、その解説する所に見られるのである。

「大日經乃義積於見仁」とはじまって

此經是法王秘宝不_レ妄示_レ卑賤之人。如下_レ釈迦出世四十余年因_レ舍利弗_レ懃懃_レ三請_レ一方_レ略說_レ中妙法蓮華_レ義上。今此本地之身又是妙法蓮華最深秘_レ処。故寿量品云常在_レ靈鷲山及余諸住_レ処。乃至我淨土不_レ毀而衆見_レ燒尽。即此宗瑜伽之意耳。又因_レ補_レ処菩薩懃懃_レ三請_レ一方_レ為說_レ之等云。(定四〇九頁)

右の文の内容について、日蓮聖人は次の様に厳しく批判されている。

此_レ積_レ心は大日經に本迹二門、開三頭一・開近頭遠乃法門有利。法華經乃本迹二門乃如之。此法門は法華經に同_レけれども、此大日經に印と真言と相加和利天三密相応世利。法華經は但意密許_レ天身口乃二密闕_レたれば、法華經をば略説と云ひ、大日經をば広説と可_レ申也と被_レ書たり。此法門第一乃_レ悞_レ謗法の根本也。(定四〇九—一〇頁)

そして文永六年四十八歳作の『法門可被申様之事』(真蹟・定四四九頁)では、『善無畏鈔』の内容を踏えて、次の様に発言されるのである。

真言宗の漢土弘始は、天台の一念三千を盜取て真言の教相と定て理の本とし、枝葉たる印真言を宗と立、宗とし

て天台宗を立^た下^すす條謗法の根源たるか。

等と諸遺文で、その内容が見られるが一、二の例に止めたい。

④の文は、經典上からの批判であつて、もともと『大日経』にも一念三千の義は無いと観られたのである。学者達が有ると思つているのは、善無畏等の盜義を知らなくて、迷つているためなのであるという。『大日経』に一念三千の義がないことを『開目抄』以外にても、繰り返えし論述が見られるところである。¹⁾

なお、真言宗の一念三千の盜義問題について、浅井円道先生は、日蓮聖人が一念三千の法門を妙案の指示に基づき、天台大師の終窮究竟の極説であるとする立場から、杉大なる天台教学を達意的に一念三千を以て代表されておられたといふ。そこで、『大日経疏』、金剛智・不空・伝教大師・円仁・円珍の著作中に一念三千の名目がなく、一念三千を念頭において密教を解釈した例もないとしても、『大日経疏』の中に、天台教学の核心の諸義を殆んど盗用しているから、日蓮聖人は真言宗をして天台の一念三千の法門を盗めりの一言で概括されておられると指摘されている。²⁾

⑤の文は、日蓮聖人の華嚴宗の一念三千観であり①③④⑦も関連内容である。華嚴宗の一念三千盜義の問題は、華嚴宗第四祖の澄観が触れたものである。①③④⑦の文も、その関連内容である。華嚴宗の一念三千盜義の問題は、華嚴宗第四祖の澄観が天台の一念三千の法門の義を盗んで、『華嚴経』の「心如工画師」等の文を生かして成仏等を立てたところより出発するという具体的な批判である。けれども人々はこの事を知らないというのである。澄観や華嚴経・華嚴宗に対する批判は『開目抄』以前にも随分と見られるところである。澄観の一念三千盜義問題を考える場合、多くは佐渡後に見られるから、そこで『開目抄』以後の澄観批判を一瞥した方がこの問題の理解を容易にさせることができるので都合がよい。今ここに煩雑さを厭はず敢えて、『開目抄』以後の遺文を検査して、その該当する箇所を挙げる

【開目抄】に現われた一念三千義について(一)(桑名)

『開目抄』に現われた一念三千義について(一) (桑名)

と次の通りである。

1、『真言諸宗違目』(真蹟完・定六三八頁)

澄観等盜^{シテ}天台^十乘觀法^ヲ入^レ華嚴經^ニ立^テ之^ヲ寫^ス華嚴宗^ニ。

2、『小乘大乘分別鈔』(真蹟断片・定七七二頁)

華嚴宗の澄観……天台大師の一念三千の法門を盜取て、我所依の經の心仏及衆生の文の心とし……かくのごとく盜取て、我宗の規模となせる

3、『木絵二像開眼之事』(真蹟曾存・定七九三頁)

華嚴の澄観が天台の一念三千をぬす(盗ん)で華嚴にさしいれ、法華華嚴ともに一念三千。但華嚴は頓頓さきなれば、法華は漸頓のちなれば、華嚴は根本さき(魁)をしぬれば、法華は枝葉等といふて、我理をえたりとおもへる意如^レ山。雖^モ然^レ、一念三千の肝心、草木成仏を不^レ知^ル事^ヲ妙染のわらひ給へる事也。今の天台の学者等、我^レ一念三千を得たりと思ふ。雖^モ然^レ法華をもて、或^ハ華嚴に同じ、或^ハ大日經に同ず。其義を論するに不^レ出^ス澄観^ノ之^ヲ見^ル。

4、『聖密房御書』(真蹟曾存・定八二二頁)

華嚴宗は天台^已前には南北の諸師、華嚴經は法華經に勝^リたりとは申^ケれども、華嚴宗の名は候はず。唐の代に高宗の后^則天^皇后と申^ス人の御時、法藏法師・澄観など申^ス人、華嚴宗の名を立^テたり。此宗は教相に五教を立^テ、観門には十^五六相などと申^ス法門なり。をびただしきやうにみへたりしかども、澄観は天台を^ハ(破)するやうにて、なを天台の一念三千の法門をかり(借)とりて、我經の心如^工画師の文の心とす。これは華嚴宗は天台

に落たりといふべきか。又一念三千の法門を盗とりたりといふべきか。澄観は持戒の人、大小の戒を一塵をもやぶらざれども、一念三千の法門をばぬすみとれり。よくよく口伝あるべし。

5、『太田左衛門尉御返事』（定一四九七—八頁）

華嚴・真言の元祖、法蔵・澄観・善無畏・金剛智・不空等が、釈尊一代聖教の肝心なる寿量品の一念三千の法門を盗取て、自レ本目の依経に不レ説華嚴経・大日経に有レ二念三千ニ云テ取入るる程の盗人にばかされて、末学深く此見を執す。無レ墓無レ墓……。

華嚴の大師云、法華経に所レ説一念三千の法門は枝葉、華嚴経の法門は根本の一念三千也云。は無二跡形一併見也。真言・華嚴経一念三千を説たらばこそ、一念三千と云名目をばつかはめ。おかしおかし、亀毛兎角の法門也。

以上の五点を挙げる事ができる。この遺文によりて⑤の文の内容はより一層、具体的に把握が可能となるであろう。さて『開目抄』以前における批判を考察してみると、日蓮聖人の華嚴経・華嚴宗に対する批判的態度は早くから見られる。二十一歳作の『戒体即身成仏義』（定五十一頁）に、菩薩歴劫修行と下され、十界互具がなしと嫌われており。建長七年三十四歳作の『諸宗問答鈔』（代師本・定二四頁）では、華嚴の仏慧と法華の仏慧とを対比して、華嚴は悪物に連たる仏慧と下されている。又、仏慧のことから開会の問題が論じられ、開会は唯法華に限るとし華嚴を下しているのは三十七歳作の『一代聖教大意』（目師本・定七三—四頁）と『二乗作仏事』（定一五六頁）等の遺文である。また『一代聖教大意』には、此教は但菩薩ばかりにて、声聞縁覚を雑えずとのべ（定六一頁）、そして、その菩薩行も

『開目抄』に現われた一念三千義について（桑名）

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)(曇名)

此教意五十二位、一々位多俱低劫経衆生界尽仏成べし。一人一生仏成物無。又二行以仏成事無。一切行積仏成。微塵積須弥山成如。

といい、歴劫成仏が嫌われ、一生成仏は一人もなしというのである。また、華嚴経は十界互具がなく心生の十界のみを明かすとし(定六二頁)、その心性の十界に関する内容については次の様に述べられている。

大乘心心より十界生。華嚴経云心如工画師、造種種五陰。一切世間中無二法而不造文。造種種五陰者十界之五陰也。仏界心法造習。心過去現在未來十方之仏頭習也。華嚴経云若人欲了知三世一切仏一応应当如是觀一心造諸如来。

また、仏性問題では華嚴が二乗に仏性を論じないため蟲法と嫌われている(定七〇頁)。

そして、三十八歳作の『守護国家論』(真蹟曾存・定一〇一頁)では華嚴の歴劫成仏等も、方便であると批判されているのである。

華嚴等速疾歴劫往生成仏、無量義経美義、檢之過無量無辺不可思議阿僧祇劫、終不を得無上菩提。… 往生・成仏俱別時意趣也。

さらに、十界互具を説かない欠点と四十余年未顕真実の立場から、総体的に批判が下されたのが次の遺文である。二乗作仏がないため衆生無辺誓願度の願いが満足しない指摘である。

自法華経外四十余年諸経無十界互具。不説十界互具、不知内心仏界。不知内心仏界、不顕外諸仏。故四十余年権行者不レ見レ仏。設雖見レ仏見レ他仏也。二乗不レ見自仏、故無成仏。爾則菩薩亦不レ見自身十界互具、不レ見二乗界成仏。故衆生無辺誓願度願不満足。故善薩不レ見レ仏、凡夫

亦不_レ知_二十界互_レ具_一、故_ニ不_レ顯_二自身_一、仏界_一。

これまで華嚴經・華嚴宗の批判を論じてきたが、『開目抄』及び1〜5遺文の内容は見られない。その内容が論じられてくるのは、澄観批判に及ぶ時に見られるのである。澄観の名指批判の最初は、正元二年三十八歳作の『二乗作仏事』（定一五五頁）においてである。その文を挙ぐると次の通りである。

澄観於_二心仏及衆生_一、文_ニ非_レ存_二一_ニ心覺不覺_一、義_ニ存_二性惡_一、義_ニ云_二澄観_一、積彼宗_ニ謂_レ此_ニ為_レ實_一、此宗_ニ立_二義理_一、無_レ不_レ通等_ニ云_一。此等_ニ法門_一可_レ許_レ不_レ哉。答_ニ云_一、弘_ニ云_一、若_レ無_二今家_一、諸_ニ円文_一、意_ニ彼_レ經_一、偈_ニ理_一、實_ニ難_レ消_一。同_ニ五_一云_一、不_レ解_二今文_一、如何_ニ消_レ解_一、心造_二一切_一、三無差別_一。記_ニ七_一云_一、忽_ニ都_一未_レ聞_二性惡_一之名_一、云_ニ云_一へり。如_レ此_ニ等_一文_一、者_ニ不_レ得_二天台_一意_一、者_ニ彼_レ經_一、偈_ニ意_一、難_レ知_レ歟。又震旦_ニ人師_一、中天台_一之外_ニ性惡_一、名目_ニあらざりける歟。又非_ニ法華_一經_一、者_ニ一念_一、三千_ニ法門_一、不_レ可_レ談_レ歟。天台_ニ曰_一、後_ニ華嚴_一、末師_ニ並_レ真_一言_ニ宗_一、人_ニ以_レ性惡_一、為_二自宗_一、依_レ經_一、誥_ニ者_一、從_二天竺_一、二_ニ伝_一たりける歟。自_ニ祖師_一、二_ニ伝_一歟。又天台_ニ名目_一を偷_レで_レ為_二自宗_一、内証_一、云_ニ云_一へる歟。能_ニ可_レ驗_レ之_一。

澄観が心仏及衆生の文に一心覺不覺の義ありとし、さらに性惡の義を立てるのは、天台の意（天台教学）によるものである。この義は、法華經の一念三千の法門に基づいているから、天台の名目を偷んで自宗の内証としたものであると批難されているのである。確實なる遺文での澄観批判の最初は弘長二年四十一歳作の『頭誦法鈔』（真蹟曾存・定二七〇—一頁）である。

法蔵・澄観等が五教に一代ををさむる中に、法華經・華嚴經を円教と立、又華嚴經は法華經に勝たりとをもえらるは、所依の華嚴經に二乗作仏・久遠実成をあかさざるに記小・久成ありとをもひ、華嚴超過の法華經を我經に劣と謂は僻見也。……澄観等が誦法は上中の誦法か。其上自身も誦法としれるかの間、悔還筆これあるか。

【開目抄】に現われた一念三千義について（桑名）

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)(桑名)

この謗法批難は『法門可被申様之事』(真蹟・定四四九頁)でも論述されている。真蹟遺文で澄観の一念三千義の盗みを問題とされているのは、佐渡に来てからの著作で文永九年二月十八日五十一歳作の『八宗違目抄』(真蹟完・定五二七—三三三頁)の内容が遺文中、最も詳細である。その結論により『開目抄』及び以後の遺文の内容の如く展開が見られるのである。

これまでは、『開目抄』において各宗における一念三千が、どう述べられているのかを検討してきたのであるが、換言すれば、日蓮聖人は一念三千を通じて全仏教を見ておられたといっても過言ではないのである。⑥の文に行く前に、一念三千義が述べられているのは次の文(定五四—二頁)である。

(イ) 伝教大師此の国にいでて、六宗の邪見をやぶるのみならず、真言宗が天台法華経の理を盗取て自宗の極とする事あらはれをはんぬ。伝教大師……專経文を前として資させ給しかば、六宗の高徳……竝弘法大師等せめをとされて、日本国一人もなく天台宗に帰伏し、又漢土の諸宗の元祖の天台に帰伏して謗法の失をまぬがれたる事もあらはれぬ。

(ロ) 又其後やうやく世をとろへ人の智あさくなるほどに、天台の深義は習うしないぬ。……正法失はてぬ。

天照太神・正八幡・山王等諸守護の諸大善神も法味をなめざるか、國中を去り給かの故に、悪鬼便を得て國中に破れなんとす。

右の(イ)の内容は、伝教大師が法華経を以て華嚴宗等の六宗の邪見を破った評価を述べられている。真言との勝負は恐らく伝教大師の『依憑集』の「新来真言家則派二筆受之相」等の文を指したと思われるが、三年後の著述では現内容が異ってきている。しかし、比叡山に大乘の円頓の戒壇を建立した功績は大きく、日本一州の山寺と学匠達が

大乘戒壇を踏むために比叡山にやって来たから、日本国一人もなく天台宗に帰伏したことになる。日蓮聖人は非常に高く評価された訳である。また(回)の文を見る時、日蓮聖人の文永六年四十八歳作である『法門可被申様之事』の左の文を思い起こすことができる。(真蹟完・定四五三頁)

仏法の滅不滅は叡山にあるべし。叡山の仏法滅せるかのゆえに異国我朝をほろぼさんとす。叡山の正法失るゆえに、大天魔日本国に出来して、法然大日等が身に入り……云云

と既に述べられている様に、前述の「天台の深義」を習うしなうと、正法を失なうという史観である。

点線の部分の「天台の深義」とは一念三千の法門を指すのである。天台の深義が衰えたから、仏教の肝心たる一念三千が習い失ない。そのため、法華経以外の教えが世に蔓延してしまった。そのため諸大善神が法味をなめること出来ず、還帰本土(神天上)されるので、悪鬼が充満し、国が滅びるのである。一念三千がなければ、法華経でなくなるといふ考え方を日蓮聖人は抱いていたのである。また、「天台の深義」とは『立正安国論』の正法をいうのである。『立正安国論』の正法を、教義的に詳しく説かれているのが『開目抄』なのである。

以上、ここまでが『開目抄』の序文に相当する部分である。この後、一念三千義の展開は、天台・伝教の迹門の一念三千より、日蓮聖人の独自の教学を形式する本門の一念三千が展開されてくるのであるが、制限枚数の都合上、次回へと続く。(未完)

〔註〕

(一) 茂田井教亨①『観心本尊抄研究序説』、②「『観心本尊抄』における『摩訶止観』—特に一念三千の受容について—」

『開目抄』に現われた一念三千義について(桑名)

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)(桑名)

(関口真大編「止観の研究」所収)。浅井円道③「上古日本天台本門思想史」、④「日蓮聖人における人間観—末法思想と一念三千—」(「日本仏教学会年報」第三十三号所収)、⑤「宗祖における観念論打破の思想」(「茂田井先生古稀記念日蓮宗教学の諸問題」所収)、⑥「宗祖における造語の妙とその意味」(「日蓮教学研究紀要」第5号所収)、⑦「大日経疏の中の法華教学」(「立正大学大学院紀要」第二号所収)、⑧「大日経疏の中の法華教学(続)」(「立正大学大学院紀要第三号所収」、⑨「日蓮の遺文と本覚思想」(「浅井円道編」本覚思想の源流と展開」所収)。渡辺宝陽⑩「事一念三千義覚え書き」(「日蓮教団の諸問題」所収)。玉城康四郎⑪「日蓮のめざす究極者」(「研究年報—日蓮とその教団」第3集所収)。庵谷行亨⑫「日蓮聖人教学研究」⑬「日蓮聖人の一念三千について—『観心本尊抄』をめぐって—」(「大崎学報」第一三三三号所収)、⑭「日蓮聖人における一念三千と立正安国」(「大崎学報」第一四二号所収)、⑮「日蓮聖人における一念三千名目処について」(「野村耀昌博士古稀記念論集」仏教史仏教学論集」所収)の十五本の論文等にて、一念三千を論じている。

(2) 例えば、文永十一年五十三歳作の『法華行者値難事』(真蹟完・定七九八頁)に見られる所の、天台・伝教は法華経の心を知り、それを口に述べて弘通したけれども「本門本尊与四菩薩戒檀雨無妙法蓮華経五字一残之」。所謂、上行等の聖人が弘める「本門の三法門」である。この他、『四條金吾殿御返事』(定六三五頁)、『観心本尊抄』(真蹟完・定七一三・七一九—二〇頁)、『義浄房御書』(定七三〇頁)、『願仏未来記』(真蹟曾存・定七四〇頁)、『富木殿御返事』(真蹟完・定七四四頁)、『波木井三郎殿御返事』(興師本・定七四八頁)、『法華取要抄』(真蹟完・定八一五・八一八頁)、『報恩抄』(真蹟・定二二四八頁)等に見える三大秘法の法門等を指す。本文中及び註に(定二二四八頁)等とあるのは、『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻の頁数を示す。

(3) 浅井円道「日蓮聖人における人間観」(前掲書)三二二頁。但し、その言わんとしていることが一念三千義の内容を暗示しているかどうかは不明であるが、この文章からは一念三千の論及は殆んどの遺文中にあると、受け取ることができるよう。しかし、その一念三千なる言葉が見られるのは遺文全体で、十分の程度である。

(4) 渡辺宝陽「事一念三千義覚え書き」(前掲書)二五七—六五頁。真偽問題も存する遺文(「真言見聞」「立正観抄」「三大秘法取要承事」)も見られるが、一念三千の論述について一覽表を作成して、三十番・四七箇所挙げている。

(5) 庵谷行亨「日蓮聖人の一念三千について」(前掲書)二九—三六頁。十九遺文(但し「十法界事」は本覚法門を述べる理由

から疑書の疑い濃い)を挙げて三十箇所超えるという。因に「日蓮聖人における一念三千名目出処について」(前掲書)三八三―八九頁では、遺文中の一念三千名目出処に限って主な例を挙げるに「一代聖教大意」から「観心本尊抄」を含めて「兄弟鈔」まで三九箇所、一念三千の名前が見える。これは、あくまでも名目出処に限っての上である。

- (6) 『注法華經』の一箇所と、四二遺文の一五五箇所を挙げる事が出来る。今、ここに遺文名とその箇所を一々掲げることが出来る。(後述にて出来るだけ引用を試みたい)が、『観心本尊抄』以前までは八五箇所において一念三千の名前を見る事が出来る。その内訳は真蹟・右写本等の確実なる遺文は佐前にて十一遺文・二〇箇所。佐渡の六遺文(「断簡新加」三四七・文永年間を含む。立正安国会編「日蓮大聖人御真蹟対照録」下巻一六四頁は文永六年に系年するが、この要文の内容と文永十年四月二十五日作の「観心本尊抄」(定七〇―一三頁)の内容と酷似しているので、『観心本尊抄』述作の爲の要文かとも思う。今は、系年が問題ではなく、記述箇所が焦点なので佐前でも佐渡でも数の上での相違は変わらぬ)・五二箇所。佐前の写本五遺文・十一箇所。佐渡の写本二遺文・二箇所の計八五箇所である。この数字から考えても、従来の説よりも実に多い記述箇所を知ることができよう。

- (7) 『開目抄』(真蹟曾存) 定五三九頁。
(8) 右同 定五三九頁。
(9) 右同 定五四一頁。
(10) 右同 定五四一頁。
(11) 右同 定五四一頁。
(12) 右同 定五五二頁。
(13) 右同 定五五二頁。
(14) 右同 定五五二頁。
(15) 右同 定五五二頁。
(16) 右同 定五六九頁。
(17) 右同 定五七一頁。
(18) 右同 定五七九頁。

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)(桑名)

『開目抄』に現われた一念三千義について(一) (桑名)

- (19) 右同 定五七九頁。
- (20) 右同 定五七九頁。
- (21) 右同 定五七九—八〇頁。
- (22) 右同 定五八九—九〇頁。
- (23) 右同 定六〇四頁。
- (24) 右同 定六〇四頁。
- (25) 右同 定六〇四頁。
- (26) 右同 定六〇七頁。
- (27) 右同 定五三九頁。
- (28) 寿量品の文の底とは、『開目抄』でいえば「されば弥勒菩薩涌出品に四十余年の未見今見の大菩薩を仏爾乃教化之一令三初登道心二等とかせ給しを疑云……云云」(定五五一頁) に対して、次の如く答えた内容の文をいう。「正此疑答云、然善男子 我乘成仏 已來無量無辺百千万億那由佉劫等云云」(定五五三頁)。その理由については、⑧の発迹頭本、⑨の本因本果の法門と結びつけて考究すべし。
- (29) 真言宗の大師が天台の一念三千を盗んだという批判は、『顕勝法鈔』以外では『善無畏三藏鈔』(定四七二—三頁)、『真言諸宗違目』(真蹟完・定六三八頁)、『観心本尊抄』(真蹟完・定七〇三頁)、『小乘大乘分別鈔』(真蹟断片・定七七一頁)、『聖密房御書』(真蹟完・定八二二頁)、『下山御消息』(真蹟断片・定一三三—六頁)、『教行証御書』(定一四八—二頁)、『太田左衛門尉御返事』(定一四九—七八頁)等の九回を今は数えられる。
- (30) 正元二年三十八歳作の『二乗作仏事』(定一五五頁)にいう「非_レ法華經_二者_一一念三千法門不可_レ談_二歟_一。天台已_レ後華嚴末師並真言宗人以_二性惡_一為_二自宗_一依_レ經_レ證_レ者_一從_二天台_一二伝たりける歟。自_レ祖師_二伝_レ歟。又天台名目を僞_レ為_二自宗_一内証_二云_レる歟。」の文より推測できる。
- (31) 『大日経』自身に一念三千が無きことを論じているのは、前述の『顕勝法鈔』『善無畏鈔』以外では、『二乗作仏事』(定一五六—七頁類推)、『善無畏鈔』(真蹟断片・定四〇九頁)、『善無畏三藏鈔』(定四七二頁)、『真言諸宗違目』(真蹟完・定六三八頁)、『観心本尊抄』(真蹟完・定七二二頁)、『木絵二像開眼之事』(真蹟曾存・定七九三頁)、

『撰時抄』（真蹟・定一〇四二—一三頁）、『教行証御書』（定一四八二頁）、『太田左衛門尉御返事』（定一四九八—九頁）等の十一回は最低でも見られる。

(32) 浅井円道先生「宗祖における造語の妙とその意味」（前掲書・四一—六頁）、「大日経疏の中の法華教学」（前掲書・一一—二二頁）、「大日経疏の中の法華教学（続）」（前掲書・一一—三頁）、「日蓮聖人遺文辞典」歴史篇（六九四—六頁）

「大日経義釈」「大日経疏」の解説を往見されたい。また、「大日経疏の中の法華教学」と（続）」にては、疏の中に法華・天台教学が、九十五箇所見えるとし、「阿字観を円融三諦・一心三観に当て、心実相を諸法実相と一と見、大日如来を久遠釈迦になぞらえ」ていると指摘されている。殊に九十五例中の「（四）（四）（四）（四）（四）の八文は、日本天台宗において円融一致の教判を論じる上で、よく引合いに出されてきた文であり、善無畏が如何に天台宗に依憑していたかの実態を示す重要な文である」と結んでいる。

(33) 正嘉二年三十七歳作の『一代聖教大意』（目師本・定六四頁）。

(34) 右同 定六九頁。又、六二頁にもあり。心生の十界については、五一歳作の『八宗違目抄』（真蹟完・定五三〇頁）にも述べられ、華嚴は思議十界といわれる。

(35) 『守護国家論』（真蹟曾存・定二二四頁）。「開目抄」以前には、その他、定五〇・六三・六五—六・一五〇・一五二—三・一五五—七・一九三・二四三・二五六・二五九・二六四・二六九・三三九・四〇〇・四八八—九・五二六—三二に華嚴批判の内容が見られる。

(36) 『八宗違目抄』の内容については「日蓮聖人遺文辞典」歴史篇の解説が簡潔なので、ここに引用すると、華嚴宗に一念三千が見られるのは「澄観の疏二九・三三の文と『華嚴経』の「心如工画師」、『蓮華三昧経』の本覚讚の文を引いて、用いることを明かす。「また『華嚴経』に一念三千の依文ありや」の問いに止観・弘決の諸文を引き、「爾前華嚴等の円教は心生思議十界を明かして心具十界を説かず、法華経のみ不思議十界互具を明かすと決す。最後に止観は『法華』によるとなす「止観」五、「弘決」五の文を引いて終る」（九一九頁）。

(37) 『開目抄』における華嚴批判の内容は、定五三九・五四一・五四三—五四八—九・五五—一—二・五五四—五・五六—七八・五七〇—一・五七四・五七六—八—一・五八三—四・五八九・六〇四頁に見られる。

(38) 真言宗が天台の法華経の理を盗み取り自宗の極としたという伝教大師の評価（定二四二—三頁）を『開目抄』では論じてい『開目抄』に現われた一念三千義について（）（桑名）

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)(桑名)

るが、文永十二年三月十四日五十四歳作の『曾谷入道殿許御書』(真蹟完・定八九七・九〇〇頁)では、伝教大師は「但天台身^一真言^二於^三勝劣^一与^二誑惑^一知而不^二分明^一。所詮贈^二於末法^一欺。」との見解内容に変わってきている。